

道徳教育を通じた学校経営の改善

— カリキュラム・マネジメントの視点から —

宮里 智恵・鈴木由美子

Improving School Management through Morality Education
— From the Perspective of Curriculum Management —

Tomoe MIYASATO and Yumiko SUZUKI

Abstract: As many people are aware, the official curriculum guidelines announced in 2017 strongly pushed the concept of curriculum management. The result thereof will be seen in the competency-based curriculum. This is an issue that should be considered not with regard to the ability of each individual teacher, but rather as an issue of school management. However, we do not see many perspectives in actual schools for organically linking the improvements to classes by individual teachers with school management. This thesis explores curriculum management from the perspective of school management, as well as the result of linking the improvements to classes by individual teachers with school management and what is necessary to do that. Furthermore, we use the example of school management through morality education to consider the effects of curriculum management.

Key words: curriculum management, competency-based curriculum, school management through morality education, effects of curriculum management

キーワード: カリキュラム・マネジメント, コンピテンシーベースのカリキュラム, 道徳教育を通じた学校経営, カリキュラム・マネジメントの効果

問題設定

2017年に告示された学習指導要領において、カリキュラム・マネジメントの考え方が強く打ち出されていることは周知の通りである。コンピテンシーベースのカリキュラムにおいては、その成果が問われることになる。それは個々の教師の力量というよりも、学校経営の課題として捉えるべき課題である。しかし学校現場においては、個々の教師による授業改善と学校経営とを有機的に結びつける視点があまり見られない。そこで本稿では、カリキュラム・マネジメントを学校経営の視点から検討し、児童生徒の学力を伸ばすための個々の教師による授業改善を学校経営と結びつけることの効果と、そのために何が必要かについて検討する。さらに、道徳教育を通じた学校経営改善の例をあげて、カリキュラム・マネジメントの効果について考察する。

1. これからの社会と開かれた教育課程

2017年の小・中学校学習指導要領の告示に先だって示された「論点整理」(平成27年 文部科学省)には、2030年の社会とその先の豊かな未来を築くために教育課程を通じて初等中等教育が果たすべき役割が示されている。そこにはグローバル化や情報化、技術革新等の進展による社会の大きな変化に対応する教育を考える上で、学校を変化する社会の中に位置付け、教育課程全体を体系化することによって、学校段階間、教科等間の相互連携を促し、初等中等教育の総体的な姿を描くべきことが示されている。

特に強調されているのが「学校を社会に開く」という視点で、そのためには教育課程もまた社会とのつながりを大切にすることが指摘されている。具体的には、①社会や世界の状況を幅広く視野に入れ、よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を持ち、教育課程を介してその目標を社会と共有していくこと、②これからの社会を創り出していく子供たちが、社会や世界に向き合い関わり合い、自らの

人生を切り拓いていくために求められる資質・能力とは何かを、教育課程において明確化し育てていくこと、③教育課程の実施に当たって、地域の人的・物的資源を活用したり、放課後や土曜日等を活用した社会教育との連携を図ったりし、学校教育を学校内に閉じずに、その目指すところを社会と共有・連携しながら実現させることが必要であるとしている。

2. 学校における教育活動と教育課程

教育課程を考える時、それが学校全体の教育活動のバランスや調和を図ったものになっているか、学校教育目標の達成にどのような役割を果たしているか、を検討する必要がある。そのためには、まず学校教育目標と教育課程が子供の実態、地域の実態から立ち上げたものになっていることが重要である。また、教育課程の作成に教職員の参画があることも重要である。自校の教育課程について繰り返し検討することで、どの教職員も学校教育目標と教育課程の関連を理解し、その上で教育実践できる状態になるからである。

教育課程は多くの場合、まず各教科等部会で作成されるが、それらを集めただけになってしまわないことが重要である。子供に育みたい資質・能力を教育課程の中でバランスを図りながら相互に有機的に関係させ、各教科等の授業にまで浸透させ、具体化していくことが必要なのである。学校全体の教育活動のバランスや調和が図られた教育課程を編成するためには、教科等を越えた視点が必要になる。各教科等を貫く視点を持つことで、単独の教科等では生み出し得ない教育効果を得ようとする教育課程の編成が可能となるのである。

3. カリキュラム・マネジメントの重要性

「論点整理」（平成27年 文部科学省）によれば、「教育課程とは、学校教育の目的や目標を達成するために、教育の内容を子供の心身の発達に応じ、授業時数との関連において総合的に組織した学校の教育計画であり、その編成主体は学校である」。また「各学校には、学習指導要領を受け止めつつ、子供たちの姿や地域の実情等を踏まえて各学校が設定する教育目標を実現するために、学習指導要領等に基づきどのような教育課程を編成し、どのようにそれを実施・評価し改善していくのかという『カリキュラム・マネジメント』の確立が求められる」とある。特に今回の改訂が目指す理念を実現するために教科横断的な視点から教育活動の

改善を行っていくことや、学校全体としての取組を通じて教科等や学年を越えた組織運営の改善を行っていくことの重要性が指摘されている。

さらにカリキュラム・マネジメントを捉える三つの側面として、以下の点が挙げられた。第1に「各教科等の教育内容を相互の関係で捉え、学校の教育目標を踏まえた教科横断的な視点で、その目標の達成に必要な教育の内容を組織的に配列していくこと」。第2に「教育内容の質の向上に向けて、子供たちの姿や地域の現状等に関する調査や各種データ等に基づき、教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連のPDCAサイクルを確立すること」。第3に「教育内容と、教育活動に必要な人的・物的資源等を、地域等の外部の資源も含めて活用しながら効果的に組み合わせること」。特に第1の側面はこれからの時代に求められる資質・能力を育むため、新たに加えられた側面であり重要である。そのため、教科等間の内容事項について、相互の関連付けや横断を図る手立てや体制を整える必要がある。

4. カリキュラム・マネジメントの具体化に向けて

上記の視点からカリキュラム・マネジメントを具体化することを考えた時、広島大学附属三原学校園の幼小中一貫教育の取組が参考になる。

広島大学附属三原学校園は、100年を越える歴史を持つ小学校をはじめ、古くから同一敷地内に幼稚園、小学校、中学校が隣接している学校である。平成10年度からは幼小中12年間の一貫教育をスタートさせた。本稿では、現在まで20年以上継続した教育活動となった幼小中一貫教育を、本稿第一筆者が在職した当初、どのようにスタートさせ軌道に乗せたのかについて、カリキュラム・マネジメントの視点から紹介する。

幼小中一貫教育をスタートさせた平成10年度からの数年間に、広島大学附属三原学校園が行った取組は主に次の7点である。

- ①各校種における子供の実態の交流
- ②学校園に共通する教育課題の把握と共有
- ③幼小中の教職員を縦割りにした組織の改編
- ④「めざす子供像」の設定
- ⑤各学年段階における子供像の設定
- ⑥「めざす子供像」に向けた教育活動の創出と評価
- ⑦一貫教育の教育課程の作成と実践の継続、振り返り

①各校種における子供の実態の交流

ある時、幼小中の教職員が集まる会議の場で交流されたのは、例えば次のような「気になる中学生の姿」であった。

- ・言葉遣いが荒い。
- ・相手が傷つくことをしたり言ったりする。
- ・友達との付き合いが表面的で本気がかかわろうとしない。
- ・自分のことが中心で、相手の気持ちになって考えることがなかなかできない。
- ・いけないことをした時に、それを認めたり謝ったりすることができにくい。

しかし、こうした「気になる中学生の姿」は中学生になってから顕在化したように見えるが、園児や児童にも同様の姿があるのではないかということに幼小の教職員が気づいた。

②学校園に共通する教育課題の把握と共有

①の姿を「人と豊かにかかわる力」が育ち切れていないという「実態」として捉えた上で、「人と豊かにかかわる力」を育て切れていない、という学校園教職員の「共通課題」として共有した。気になる子供の実態を「所属の校種以外で起こったできごと」として捉えるのではなく、全教職員が自分自身の教育課題として捉えたのである。

③幼小中の教職員を縦割りにした組織の改編

図1は幼小中の教職員を縦割りにした組織のイメージ図である。もともとあった幼稚園部会、小学校部会、中学校部会を残しつつ、幼小中一貫教育を進めるうえで核となる「3部会（表現部会、集団部会、環境部会）」という幼小中教職員の全員がいずれかに所属する縦割りの組織を新たに作った。また、研究全体を推進する「合同研究推進部会」も縦割りとし、幼小中教職員の意志疎通が円滑にできるようにした。

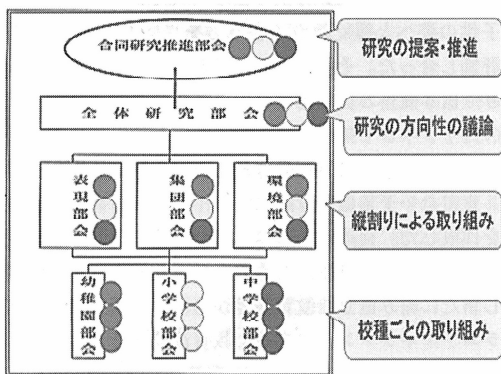


図1 幼小中の教職員を縦割りにした組織図

どんなすばらしい教育実践もそれを推進する組織がなければ進まない。また推進する組織のリーダーシップと同じほど重要なのはフォロワーシップである。ある時はリーダーとなり、ある時はフォロワーとなることによって教職員の中に連帯が生まれるようになった。

④「めざす子供像」の設定

「人と豊かにかかわる力」を「社会性」と捉え直し、めざす子供像として『他者および集団を意識したかわりを繰り返すことを通して、社会性を獲得していく子供』を設定した。これは中学3年生の卒業時の姿として設定した。

⑤各学年段階における子供像の設定

上記「めざす子供像」は中学3年生の卒業時の姿として設定したが、さらに幼稚園年少から中学3年生まで12年間を4期に区切り、各期におけるめざす子供像をスモールステップとして設定した（図2）。

	年少～年長	1年生～3年生	4年生～6年生	中1～中3
まわりのことを考え	初めて所属する集団において自分以外の人の存在を感じ、身近な人や小集団に親しみ、	新しい環境において身近な人や学級集団に親しみ、自分にも相手にも思いがあることに気づき、	自分や相手の思いには違いがあることがあることに気づき、それを認めながら、	他者や集団の思いを受け止め、自分の思いと調和させながら、
適切に判断し		状況や自分や相手の思いを感じながら、	自分がやるべきことを考え、	自他や集団にとってよりよい状況をつくるための方法を考え、
行動化できる	相手に対して自分の思いを出したり、自分の思いを相手に伝えたりする。	時には自分の思いを我慢したり頑つたりしながら、進んでかかわろうとする。	相手に働きかけを、	目的に向かって行動する。
年長・小6・中3の子どもたちは、それぞれの校園のリーダーとして、自覚をもった判断、行動ができる。				

図2 各学年段階における子供像

⑥「めざす子供像」に向けた教育活動の創出と評価

ここがカリキュラム・マネジメントの具体である。幼小中一貫教育の内容を創出するにあたり、附属三原学校園は全ての教育活動を新しく創り出したわけではない。これまで行ってきた教育活動も今一度振り返り、その価値を問い直しながらより効果的な内容や方法へと変化させていった。この時の問い直しの視点は、その教育活動のどの部分に「社会性を育てる」部分があるかという点である。すでにある教育活動を編みなおし、新たな価値を加える作業としてのカリキュラム・マネジメントであった。

また、これと並行して行ったのは新たな教育活動の創出である。行った取組は主に次の4点である。

1) 各校種の授業・保育を相互に参観すること



図3 幼稚園の教育活動の様子を参観

図3は幼稚園の教育活動の様子を参観した時のものである。参観者は園児の「社会性の芽生え」を捉えつつ、それを自分の校種でどのように育てていけばよいかを考えることを目的として参観した。小中の教職員にとっては園児と幼稚園教諭の様子を直接見て、自分の所属の児童や生徒がかつてこのような姿であったことを具体的に知り、発達の段階を踏まえた教育活動の必要性を学ぶ機会ともなった。小中の授業を参観する時にも同様の目的や効果が共有された。

2) 各校種の授業・保育に乗り入れて授業・保育をすること

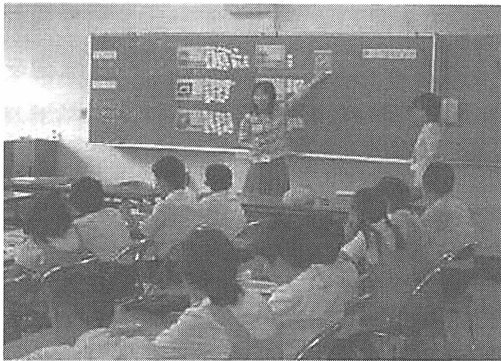


図4 中学校の教員が小学校に乗り入れ授業

図4は中学校の教員が小学校に乗り入れ授業を行った時のものである。授業や保育を参観するだけでなく、単独またはチームティーチングで直接子供に授業や保育をすることにより、子供理解が一層進むとともに、相互の教育活動についてより具体的に学び合うことができた。

3) 園児・児童・生徒を直接交流させる合同授業や合同行事を行うこと



図5 合同行事（幼小中合同運動会）

図5は、幼小中合同運動会で園児とペアとなった中学生が一緒に踊る場面である。人と豊かにかかわる社会性を身につけさせようとする目標に向け、学校園内に存在する多くの子供達を教育資源と捉え、異校種や異年齢の子供を直接交流させる取組を数々創り出した。その中で子供達は相手を意識した行動を求められる場面に度々遭遇し、自分の力で判断し適切な行動を選び出し、実行し、振り返るサイクルを幾度となく繰り返した。

このような教育活動の積み上げにより、④で示した「|気になる中学生の姿」は数年のうちに大きく姿を変え、相手を意識したかわりを大切にできる姿へと変容していった。幼稚園から中学校までの12年間一貫教育のカリキュラムの中で、教職員が園児児童生徒に向けるまなざしを共有し、同じ方向を向いて進んだ成果が子供の成長した姿であった。

4) 1) 2) 3) のための合同会議

上記の取組が成果を持つためには、教育活動前後の教職員の打合せや振り返りが不可欠であった。めざす子供の姿へと導く教育の在り方を忌憚なく話し合い、評価し合った。その積み重ねはPDCAサイクルとなり、次年度へと引き継がれていった。

⑦一貫教育の教育課程の作成と実践の継続、振り返り

育てたい子供像の育成に向け、一貫教育の教育課程を作成した。前述した通り、新しく創り出した教育活動と従前から行っていたものを新たな視点で見つめ直し新たに編み直した教育活動がある。しかし、カリキュラム・マネジメントの視点で教育活動を考えることにより、めざす子供像に向けた道筋が見えやすくなり、12年間を見通した教育が浸透していった。換言すれば

12年間の教育課程があることにより、教職員は自分の目の前の子供の姿が12年間のどの位置にあるのかをつかみやすくなり、安心して教育活動を行うことができるようになったのである。

実践を継続することで教育課程を安定化させる一方、常に見直しも行うことも重要である。カリキュラム・マネジメントの視点から教育活動を見直し、行っている教育活動が新たな時代に求められる資質・能力を育てるものになっているかを、全ての教職員が参加して、考え議論する必要があるのである。

5. カリキュラム・マネジメントを進める学校全体としての取組

平成28年度広島大学附属三原学校園幼小中一貫教育研究会で講演された天笠茂氏（千葉大学特任教授）はカリキュラム・マネジメントに取り組むことで生まれる効果として以下の点をあげている。第1に授業改善や組織運営の改善等、学校の全体的な改善につながる。第2に教職員の経営参画意識が高まること。第3に円滑なコミュニケーションによって風通しの良い職場環境が整うこと。第4に職場の意識変革ができること。第5に全ての教職員の意識が向上し、教育課程の新しい動向に対応しながら、学校全体で子供達の指導に当たることができること、である。上述した三原学校園の一貫教育の取組からは、まさにこれらの効果を具体的に見いだすことができる。

一方、天笠氏は講演の中でカリキュラム・マネジメントを進めるにあたっての課題も指摘している。第1に、カリキュラムという概念の理解が不足していること。第2に、カリキュラム・マネジメントの必要性を理解してもらうのに時間がかかることが予想されること。第3に、効果的に実施するにはどのようにしたらよいか考え続ける必要があること。第4に、一人ひとりの教職員にどのように意識化を図るかということ、である。

上述した三原学校園もこうした課題に直面しながら一歩ずつ進めていった。粘り強く継続する中で子供の人とかかわる姿に変化が見え始め、成果を感じるようになった。これは幼小中の教職員がめざす子供像を共有し、協働して一貫教育に取組んだ結果に他ならない。カリキュラム・マネジメントの成果を子供の成長という視点によって示した好例と言えるだろう。

学校の教育活動と経営活動とを一体的に運用する上で、カリキュラム・マネジメントへの着眼は非常に重

要である。これからの学校は総体としての教育課程経営を進める必要がある。

（宮里智恵「カリキュラム・マネジメントの考え方と実際—「社会に開かれた教育課程」をめざして—」平成28年度広島市教頭会研修（平成28年12月15日）に修正加筆したもの）

6. 道徳教育を通じた学校経営の改善 — 実践例から —

ここでは、第二筆者が長く関わってきた広島県三次市立みらさか小学校・三良坂中学校（以下、みらさか学園と表記する）を事例として、道徳教育を通じた学校経営の改善について取り上げ、先述したカリキュラム・マネジメントの視点からの考察を加えることにする。

みらさか学園は、施設一体型の小中一貫校である。H29年度、30年度文部科学省委託事業「道徳教育改善・充実」総合対策事業の指定を受け、道徳教育を中心に据えた学校経営を行ってきた。H29年度の研究主題は「自己を見つめ、よりよく生きようとする力をはぐくむ道徳教育～小中をつなぐ主体的・協働的な学びと評価を通して～」であった。文部科学省委託事業を受託後、小中合同授業研修を何度も重ね、児童生徒観のすり合わせ、授業スタイルの模索、小学生と中学生の発達の違いの理解、教師同士の教育観の交流を行ってきた。

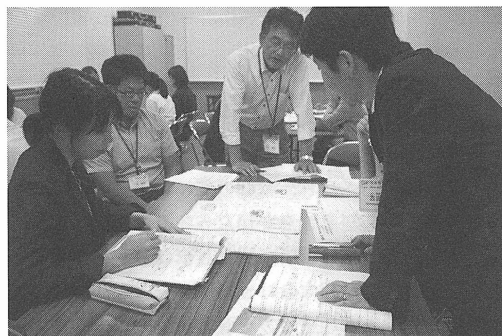


図6 小中合同研修会の様子

その一つの成果が、平成29年11月10日（金）に開催された研究大会であった。この研究大会で提案する授業の模擬授業と検討が、8月7日（月）の小中合同授業研修で行われた。この日の研修では、「泣いた赤鬼」という教材を使って、小学校3年生、6年生、中学校2年生で授業提案するために、模擬授業が行われた。「泣いた赤鬼」は小学校中学年の教材として使われる定番のものだが、学年を変えて授業提案する試みを通

して小学校と中学校とを縦に接続する視点の獲得が促された。また、小中学校で育てたい子供像の一つとして、「友情・信頼」の価値を軸に置き、この価値を、発達段階に応じて育てるための手立てについて議論が交わされた。小学校と中学校の教師が、同じ教材を見ながら小学生ならこう反応するだろう、中学生ならこう反応するだろう、意見を引き出す手立てはどれが適切か、など自由な意見交流をすることで、次第に小中9年間でどのような子供を、どのように育てるのか、考え方や方法が明確になっていった。その発表の場であった研究大会を越えて、学校全体が一つの目標を見つけたかのような感じがあった。



図7 授業評価による指導の改善

こうした教師の姿勢に影響を与えたのが、平成28(2016)年3月2日に開催された小中一貫教育に関する研修(講師:宮里智恵)だった。その研修では、広島大学附属三原学校園で長く小中一貫教育に取り組んできた講師の経験から、小中連携の難しさとともに、学校経営上のメリットや、児童生徒の教育上のメリットが具体的に述べられ、教師の側に授業改善が学校経営の改善につながる視点もたらされた。このことが、小中合同授業研修において活かされていた。

平成30年度の研究大会は、研究主題「自己を見つめ、よりよく生きようとする力を育む道徳教育～小中をつなぐ主体的・対話的で深い学びの授業づくりと評価を通して～」であった。平成29年度の大会から評価の目的や方法、そのためのよい授業づくりといった基本に立ち返っての教師の学びが始まった。学校の教師には異動があり、何年間もかけて積み上げてきた実践を継承していくのは難しいことである。積み上げてきた良き雰囲気や継承しながら、児童生徒の実態に合わせて発展させていくためには、学習指導案の書き方、それを支える教材分析や児童生徒理解の方法、さらにいえば児童生徒を見取る教師側の人間観が問われることに

なる。平成30年度に向かった研修においては、第二筆者が提唱している心情曲線による道徳教材分析の方法、ルーブリックによる授業評価方法、板書の工夫など、細かな授業技術の共有が行われていった。ルーブリックによる評価方法は、みらさか学園においてHop, Step, Jumpの3段階による評価方法として定着していった。

特に指摘したいのは、これらの授業技術を小学校、中学校の教師が話し合いながら作っていったことである。小学校と中学校の教師では、見ている子供の実態も異なるし、専門の力量も異なっている。授業技術もそれぞれの校種や教科によって異なっている。道徳科は、校種や教科の違いを越えて、児童生徒観、教材観、教師自身の人間観やそれらに基づいた授業技術を共有できる科目である。道徳科の授業開発を通して、学校経営の基礎でもある教師同士の教育観、人間観、授業づくりの基礎となる学級観、学校観を交流しながら研究大会に向かって準備をすることで、学校全体が向かう方向が共有されていったように思われる。



図8 小学校と中学校の教師によるTT

以上の事例を、カリキュラム・マネジメントの視点から検討する。本稿においては、「論点整理」(平成27年 文部科学省)に従ってカリキュラム・マネジメントを、学習指導要領を踏まえつつ、子供たちの姿や地域の実情等を踏まえた学校教育目標を設定し、それを実現するために教育課程を編成し、実施・評価し、改善していくことと捉えた。カリキュラム・マネジメントを運用するためには、第1に、各教科等の教育内容を相互の関係で捉え、学校の教育目標を踏まえた教科横断的な視点で、その目標の達成に必要な教育の内容を組織的に配列していくこと、第2に、教育内容の質の向上に向けて、子供たちの姿や地域の現状等に関する調査や各種データ等に基づき、教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連のPDCAサイクルを確立すること、第3に、教育内容と、教育活動に必

要な人的・物的資源等を、地域等の外部の資源も含めて活用しながら効果的に組み合わせることが重要であることが指摘されていた。これらの視点から検討することにする。

まず学校教育目標の設定、実行とエビデンスに基づく改善のサイクルについてであるが、みらさか学園の平成30年度学校経営計画によれば、「自立と共生の力をもった、たくましく生きる児童・生徒の育成」である。自立とは、「自ら学び、自ら考え、自主的・自律的に行動できる。夢や目標をもち、その実現に向けてくじけず努力・挑戦できる。」であり、共生とは、「違いを認め合い、他者と協働して課題解決（創造）できる。学校や地域社会に貢献し、共に高まり合おうとする。」である。この学校目標に基づいて、子供の姿や地域の実態を踏まえて研究主題が設定されている。

平成30年度の研究主題設定の理由には、平成29年度の意識調査の結果から、「集団としてよりよい学級や学校をつくろうとする姿勢と『道徳の時間』で自分のことを振り返りながら考えることとの間に関連があることが分かった」とされている。平成30年度の実行は、平成29年度の研究によって得られた成果と課題に基づいて、課題解決のために行われたものであり、ここにPDCAサイクルを見て取ることができる。前述したように、確かに平成29年度の研究大会終了後、教師の間には新たな課題が見つかったような雰囲気があった。それは、この記述から考えると、「道徳の時間」で自己を振り返る活動をすることが、学校目標の達成につながることへの気づきだったのではないかと考えられる。

次にカリキュラム・マネジメントの運用について検討する。第1に、各教科等の教育内容を相互の関係で捉え、学校の教育目標を踏まえた教科横断的な視点で、その目標の達成に必要な教育の内容を組織的に配列していく必要がある点について、みらさか学園では、道徳学習プログラム（レインボープログラム）として全学年で道徳科と各教科や領域等を意図的に関連付けた計画的、発展的な指導を行っている。これは、各学年においては教科横断的なカリキュラムであり、横の繋がりを意識したものである。さらに、9年間を見通した各学年における道徳学習プログラムの実践は、カリキュラムの縦の繋がりを促進することに繋がっている。学年や教科を越えた道徳学習プログラムの理解と実践が、学校全体で教育課程の実施に取り組むことを促していると考えられる。

第2に、教育内容の質の向上に向けて、子供たちの姿や地域の現状等に関する調査や各種データ等に基づき、教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る

一連のPDCAサイクルを確立することについてであるが、上述のようにこのサイクルは確立されているとあってよいだろう。それに加えて、三原学園での実践が成果を上げた理由の一つとしてあげられていた、教育活動前後の教職員の打合せや振り返りが不可欠だという点から次のことを指摘したい。みらさか学園では学校全体の教育課程の理解と実践は、講師や指導主事を招いて行われる小中学校合同研修の場で、授業開発という具体的実践的レベルで何度も教職員に共有されていた。道徳授業の教材開発と模擬授業の実践、意見交流、評価・改善を、小中学校合同で繰り返す行うことで、自然と自分の授業が学校全体の教育課程のどこに位置づくかが理解されていったのではないかと思われる。それは明確な意識化ではないかもしれないが、小学校1年生の子供が9年たったときどのような姿になるか、そのプロセスの中でどのような問題が生じるか、どうすれば解決されるのか、学年や教科を越えて共有されることで、教育課程の意味が見えるようになっていったのではないかと思われる。

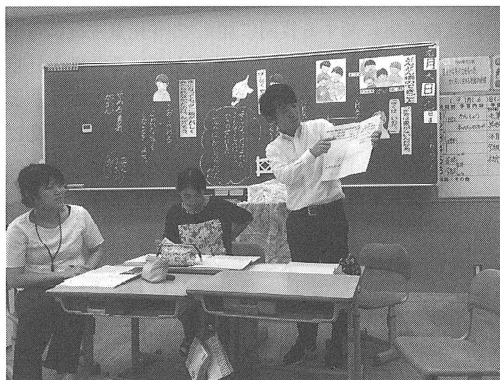


図9 授業検討会の様子

第3に、教育内容と、教育活動に必要な人的・物的資源等を、地域等の外部の資源も含めて活用しながら効果的に組み合わせることについてであるが、道徳学習プログラムの中でふるさと「三良坂」の地域教材を開発し実践することで、地域や保護者を巻き込んだ「社会に開かれた教育課程」の開発を実践しているといえよう。「『みらさか』の歌にこめて」という資料を使った授業実践では、『みらさか』という歌の制作に関わった地域の方、『みらさか』を子供時代に実際に歌ってレコーディングした保護者が授業に参加して、自分の思いを生徒に語っていた。このように地域や保護者を巻き込んだ実践が行われており、このことは、学校目標にある「共生」である「地域に学び、地域を愛し、地域に貢献する児童生徒」の育成とも関わっている。

カリキュラム・マネジメントがうまく機能しているといえよう。

最後に、研究成果の検証方法についてである。みらさか学園の研究仮説は、「道徳学習プログラムを更に機能化させると共に、道徳科の目標で求められる学習(深い学び)を充実させることができれば、日常生活や今後出会うであろう様々な場面、状況で道徳的価値を実現するための適切な行為を主体的に選択し、実践することができる道徳性を養うことができ、よりよく生きようとする力を高めることができるであろう。」であった。この仮説を実証するための研究実践の中で、めざす児童生徒の資質・能力として以下の4点があげられている。それは「知識：道徳的価値の理解、人間理解、他者理解」、「スキル：コミュニケーション能力」、「意欲・態度：主体性」、「価値観・倫理観：生命尊重、希望と勇気、努力(克己)と強い意志、思いやり、相互理解・寛容、郷土愛・地域貢献」であった。

研究成果の検証方法として、児童生徒および教職員への意識調査の実施と児童生徒の行動観察、道徳ノート等があげられている。教職員への質問項目においては道徳の時間の充実に関する質問に加えて、「児童生徒に道徳性を育成するための体験活動は充実していると思う」「自校の道徳教育に関する研修は充実していると思う」といったカリキュラム・マネジメントに関わる項目があげられている。こうした質問項目からも、道徳の授業研究と学校経営とを繋ぐ視点が見られるといえよう。

おわりに

道徳教育を通した学校経営の改善について、カリキュラム・マネジメントの視点から検討を加えていった。カリキュラム・マネジメントとは、子供たちの姿や地域の実情等を踏まえた学校教育目標を設定し、それを実現するために教育課程を編成し、実施・評価し、改善していくことであった。運用にあたっては、第1に、学校目標に基づいて組織的に教科内容を配列すること、第2に、教育課程の編成、実施、評価、改善のPDCAサイクルを確立すること、第3に、保護者や地域の人々等を巻き込んでカリキュラム・マネジメントを確立することが重要であるとされた。

広島大学附属三原学校園での20年以上に渡る幼小中一貫教育の実践について、カリキュラム・マネジメントの視点からの分析を加えることで、カリキュラム・マネジメントを効果あるものにするための様々な工夫が明らかになった。

これらの点から、平成29年度、30年度文部科学省「道徳教育改善・充実」総合対策事業指定校のみらさか学

園の実践を検討した。その結果、みらさか学園においてはカリキュラム・マネジメントが道徳教育を通して行われていること、それにより、教科等を越えた学校全体の教育課程の運用を、管理職のみならず、すべての教職員によって行っており、道徳授業の開発実践が学校経営に繋がっていることが明らかになった。

さらにみらさか学園の実践から、学校独自の取組として行っている道徳学習プログラムのような教科横断的なプログラムを学年ごとに行うことで横と縦の繋がりが作られること、小中合同研修において具体的実践的レベルでの授業研究を何度も繰り返し行うことで意識の共有が図られること、質問紙にも授業研究と学校経営の繋がりに関する項目を入れることで両者の関連の意識化が図られることなど、道徳科だからこそできることが明らかになった。道徳科がもつ、校種・教科によらない教科としての特性が、教師集団の風通しのよさを促進し、学校全体のカリキュラム・マネジメントをやりやすくしたのではないかと、その結果、教師集団が日々の授業づくりと学校経営の関連を意識しやすくなったのではないかと考える。

課題として以下の点をあげる。道徳教育を通した学校経営として今回取り上げたみらさか学園は、文部科学省の委託事業を受けた学校であった。2年間で結果を出さなければならないことが、教師集団の意識の共有化により影響を与えたともいえる。受託事業を終えた後もこれらの利点を継承するためには、持続的なシステム作りが必要である。今後の推進体制作りをどのようにするかが課題であるといえよう。

引用・参考文献

- 広島大学附属三原学園編著『21世紀型“読み・書き・算”カリキュラムの開発 幼小中一貫校からのメッセージ』明治図書 2005年
- 広島大学附属三原学校園編著『21世紀型教育への提言 幼小中一貫で育つ子どもたち』溪水社 2008年
- 広島大学附属三原学校園編著『幼小中一貫で育てる「かかわり力」～広島大学附属三原学園での12年間』溪水社 2010年
- 第32回広島県中学校道徳教育研究会(兼「道徳教育改善・充実」総合対策事業 三良坂中学校区公開研究会)平成29年度備北大会集録」三次市立みらさか小学校・三良坂中学校、2017年11月10日
- みらさか学園公開研究会(文科省委託「道徳教育改善・充実」総合対策事業)配付資料(2017年11月10日)
- みらさか学園公開研究会(文科省委託「道徳教育改善・充実」総合対策事業)配付資料(2018年10月5日)

文部科学省 教育課程企画特別部会 論点整理

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo_0/gijiroku/_icsFiles/afeldfile/2015/09/29/1362371_2_1_1.pdf

(2018年11月28日最終閲覧)

広島大学附属三原学園ホームページ

https://www.hiroshima-u.ac.jp/fu_mihara

(2018年11月28日最終閲覧)

みらさか学園ホームページ

<http://www.mirasaka-j.hiroshima-c.ed.jp/>

(2018年11月28日最終閲覧)

※本稿の執筆にあたって広島大学附属三原学校園，広島県三次市立みらさか学園に多大なご協力をいただきました。記して感謝申し上げます。